

# 近江商人の小樽進出

## — 『北海道在住滋賀県人』の分析を中心に—

篠崎恒夫

- 第1節 はじめに
- 第2節 江州人の北海道移住
- 第3節 『小樽在住県人録』の分析
- 第4節 近江商人活動の諸側面
- 第5節 おわりに

### 第1節 はじめに

小樽市の歴史を考えると常に抱いていた疑問は、小樽市の明治大正期の盛興に対して近江商人はお膳立てだけなのか、近江商人の実質的な寄与はなかったのかというものであった。ところが最近、この疑問に答えることが可能となるチャンスが訪れた。『北海道在住滋賀県人』<sup>1)</sup> という人名録の存在が分かり、実際に検分することができることになったのである。

本論は、人名録の単なる紹介に終わらず、人名録が内包する可能性をできるだけ具象化したいという衝動の産物である。

### 第2節 近江人の北海道移住

北海道開発の歴史においてははじめは全国から雑多な商人が来ていたが、やが

---

1) 本表は野沢鉄嶺『北海道在住滋賀県人』北海道滋賀県人同盟会、明治43年より小樽在住者のみを抽出して『表1 小樽在住滋賀県人』とした。

て近江商人が主流となり、松前の有力商人の大半を占めた。

当時、商人が北海道へもたらした内地の商品は、米・酒・麴・塩・煙草・鍋・小刀・針・古着・穀物・糸・漆器・耳環・煙管などで、内地へ持帰ったのは・鱈・海鼠・鮭・鱒・鮑・昆布などで、日本海経由で近江を通過して京阪地方へ供給された。当初、水産加工技術が十分でなかったため、鰯などは肥料として運ばれ、稲作に魚肥を用いたのは近江の神崎郡が最初で金肥と呼ばれた。

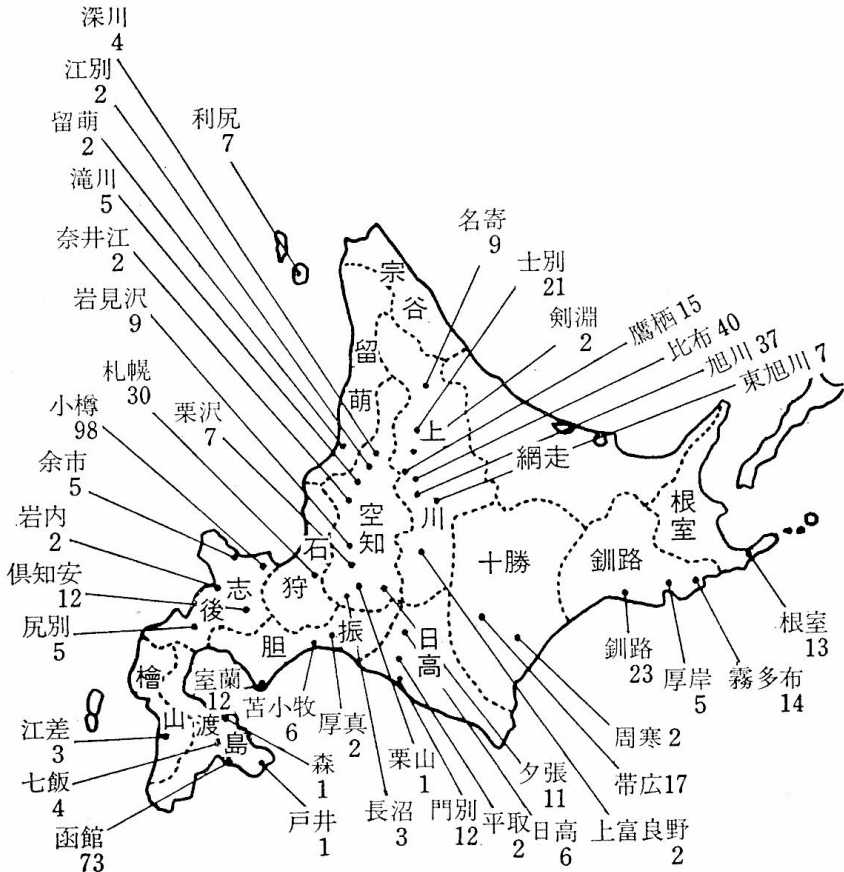
近江商人の北海道への進出の様子を表したのが図1。明治末における各地の進出事業所・農場（家）の分布を示している。本図を一見したとき気づくのは、近江商人の進出先が全道隈なく分布していることである。そのうち、都市部にあつて抜きんでているのが小樽で98事業所とあり、次いで函館が73、旭川37、札幌30と続く。地方部で突出しているのが比布の40で、これは明治期に見られる現象で、甲賀郡下田村から一村あげて比布と鷹栖に移住し主として農業に従事しているものである。小倉はこうした現象を商業人ではないにしても近江人の「郷党意識」の典型とみている<sup>2)</sup>。

小倉はまた、こうした現象を記録している『人名録』を、「今日残っている史料のうちでもっとも完備したもの」<sup>3)</sup>と高く評価している。本稿では『北海道在住滋賀県人』に基づいて小樽在住者の表1を作成し、次節以降で内容を分析することにする。図2は出身地を簡明に示しているところから添付した。

なお、『県人録』はほぼ渡道年順に記載されているところから、表1もおのずから江戸末期・明治初年組に始まって後年の渡来組に至っている。

2) 小倉栄一郎『近江商人の経営』サンブライツ出版、昭和63年、162頁

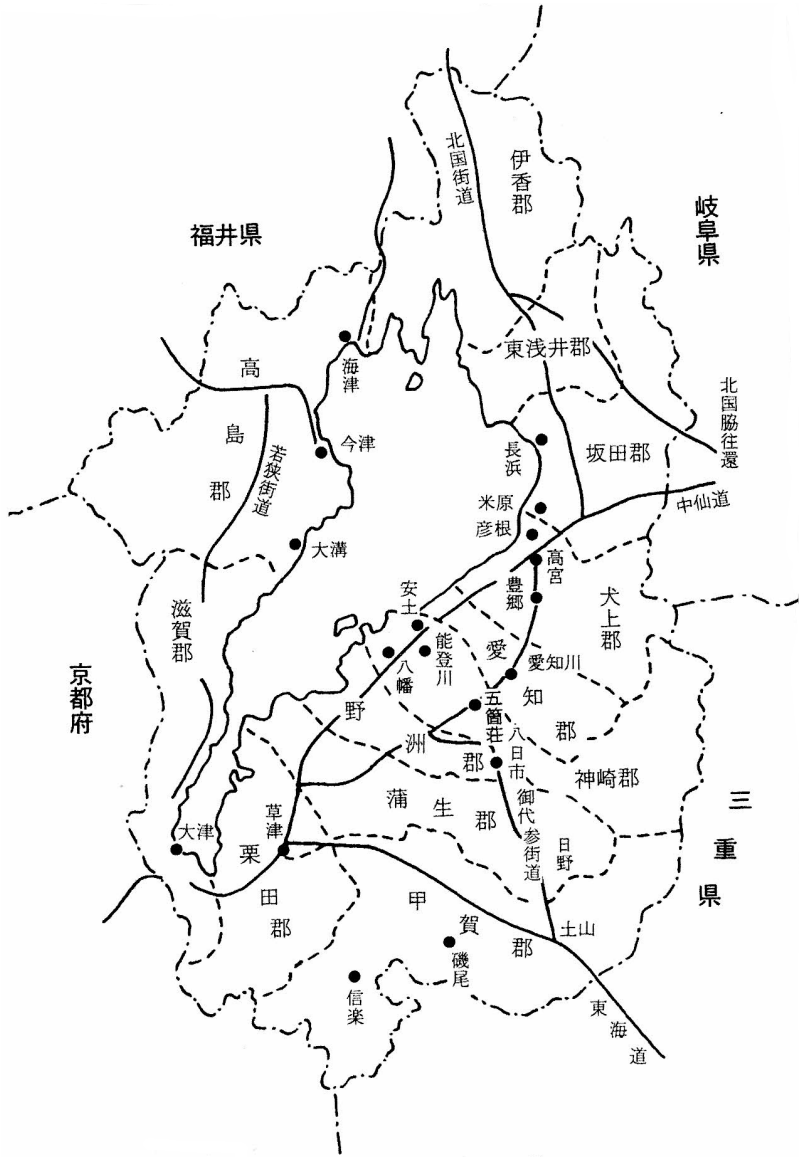
3) 小倉栄一郎『近江商人の系譜』日経新書、昭和55年、51頁



数字は店・農場の数

小倉栄一郎『近江商人の系譜』日本経済新聞社、昭和55年、52頁

図1 明治末における江州人経営の分布



小倉栄一郎『近江商人の経営』サンブライ出版、昭和63年、14頁

図2 近江の国（滋賀県）地名と街道

表1 小樽在住滋賀県人

番号	氏名	住所	事業名	事業種	渡道年*	出身地
1	速水豊次郎	銭箱村	㊦速水豊次郎	海産卸商	明15	犬上郡千本村
2	村林己之助	入舟町13	㊦村林己之助商店	履物問屋	明4	八幡町
3	石橋彦三郎	奥沢	㊦石橋彦三郎	醤油味噌醸造	明8	彦根町
4	前川太兵衛	永井町32	㊦前川太兵衛支店	呉服太物問屋	創明19	犬上郡高宮町
5	中井戸利助	永井町	余中井戸利助支店	呉服太物問屋	創明1	犬上郡高宮町
6	吉田興喜藏	色内町9	秀吉田合資会社	和洋織物問屋	創明33	東浅井郡虎姫町
7	本間豊七	稲穂町23	本本間小樽出張所	海産物農産物木材業	慶応元	高島郡青柳村
8	中井戸良助	入舟町3	㊦中井戸良助商店	呉服太物洋服メリヤス帽子類問屋	明21	愛知郡愛知村
9	小杉左右衛門 小杉五郎左衛門	入舟町50	㊦小杉合名会社 小樽支店	呉服太物問屋	明15	北五箇荘村
10	堀井音次郎	入舟町畑64	㊦堀井音次郎	農場主	万延元	東浅井郡内保村
11	秋野音治郎	入舟町41	㊦秋野音治郎商店	薬種商	明15	八幡町
12	松本栄三郎 中村庄次郎	永井町	㊦中松小樽支店	和洋小間物雑貨卸	創明40	松本坂田郡鳥居本村 中村神崎郡八日市町
13	麻里傳之助	金曇町7		船舶業	明24	東浅井郡朝日村
14	小堀鶴吉	山ノ上町	㊦小堀鶴吉支店	呉服木綿問屋	創明22	彦根町
15	神野宇傳 神 野新平	永井町	㊦神野兄弟合名会社 小樽支店	呉服太物問屋	創明32	犬上郡高宮村
16	稲本彦太郎	色内町2	㊦稲本彦太郎	米穀荒物雑貨海陸物産委託売買商	明15	神崎郡山本村
17	若林貞三	色内町71	㊦若林貞三商店	薬蚊帳すだれ官庁被服煙草	明30	神崎郡山上村
18	中村九一郎	住初町2-17	㊦中村製綿工場	綿布問屋 打綿機械製作	明34	北五箇荘村
19	西村喜代登	入舟町畑4	㊦西村喜代登	石鹸、洗濯ソーダ、 蠟燭製造販売	明27	犬上郡平田村
20	成田八太郎	入舟町37	㊦成田八太郎	糸綿卸商	明22	蒲生郡武佐村
21	川南重祐	相生町2	近江堂	教科書・学校用品販売	創明26	八幡村
22	衣斐千次郎	稲穂町14	㊦衣斐千次郎	質業	明23	彦根町
23	池田彌吉	色内町	㊦池田合名会社	各国銘茶茶器類、 諸紙類商	創明20	蒲生郡玉緒村
24	早見彌吉	入舟町	㊦早見彌吉	呉服太物、洋織物商	明21	八幡町
25	馬場栄吉	港町1	㊦馬場合名会社	呉服太物洋服反物卸小売商	明19	犬上郡高宮村
26	川崎庄藏	稲穂町	㊦川崎呉服店	呉服太物、洋織物商	創明34	
27	辻田吉之助	南浜町6丁目7	㊦辻田吉之助	農産商	明31	東浅井郡速水村
28	石居四郎平	色内町	石居四郎平出張店	肥料商	創明39	長浜町
29	弓削万治郎	色内町17	㊦弓削万次郎	海陸物産貿易品 魚油委託売買	明21	東浅井郡竹生村
30	小杉佐助	色内町40	㊦末広屋	呉服太物洋織物商	明37	北五箇荘村
31	尾本為次郎	花園町14	㊦尾本為次郎	京染呉服一式	明37	犬上郡福満村
32	若林政吉	花園町18	㊦若林政吉	呉服太物洋織物商	明35	彦根町

33	伏木徳二郎	信香町		酢・味噌醸造		父坂田郡神坂村
34	伊藤留三郎	色内町51	㊦岩崎屋小樽支店	銅鉄機械石油 自動車販売	明40	犬上郡豊郷村
35	古川銀次郎		日本銀行小樽支店詰 係	日本銀行小樽支店調査 係	明42	彦根町
36	伊東徳三郎	相生町14	㊦伊東徳三郎	和洋古着問屋、質業	明40	八幡町
37		信香町1	△池田酒造店	清酒醸造	明23	蒲生郡玉緒村
38	森川増次郎	色内町51	△森川製網工場	糸網ロープ卸商	明17	犬上郡高宮村
39	前川弥太郎	山田町7	㊦前川弥太郎支店	呉服洋服卸	創明41	彦根町
40	澤村卯三郎	山ノ上町26	㊦沢村卯三郎	煉瓦製造販売建築請 負	明35	彦根町
41	塚本長治郎	色内町	㊦塚本商店	呉服太物問屋		本店南五箇荘村
42	塚本傳七	住初町31	㊦塚本伝七	質業	明24	南五箇荘村
43	薩摩貞二郎	相生町1	㊦薩摩貞二郎	漁業	明16	愛知郡稲枝村
44	三上直兵衛	相生町3	㊦三上直兵衛	石蠟製造薬種業	明12	南五箇荘村
45	奥野吉造	堺町7		会社員 仲立業	明7	蒲生郡北ノ庄村
46	東川菊次郎	堺町47			明25	八幡町
47	川上力蔵	色内町	㊦川上力蔵	呉服太物、洋織物商	明29	東浅井郡虎姫町
48	大原にわ子	小樽港	旗亭色内亭 支店月の家	旗亭	明26	甲賀郡大原村
49	山川市松	住初町15	菊水	料理屋	明27	高島郡今津町
50	松岡松蔵	色内町14	㊦山城屋松岡蔵商店	各種靴靴		八幡町
51	西村治兵衛	住ノ江町4-27	㊦西村治兵衛	米穀荒物雜貨商	明38	蒲生郡朝日野町
52	小杉武蔵	若松町24	扇屋△小杉武蔵	和洋小間物雜貨商	明36	北五箇荘村
53	野澤善三郎	花園町14	㊦野沢善三郎	印刷業	明37	蒲生郡鎌掛村
54	田中傳右衛門	入舟町56	△田中傳右衛門	清酒醸造	明18	愛知郡豊埴村
55	奥村徳蔵	有幌町8	㊦奥村徳蔵	木材業	明29	愛知郡西小掠村
56	吉岡武兵衛	稲穂町裁判所下		代書業	明35	愛知郡八木荘村
57	山谷文吉	花園町畑10	㊦山谷文吉	木材業土木建築請負 業	明30	坂田郡柏原村
58	桑田伊三郎	相生町27	△桑田伊三郎	漁業	明22	八幡町
59	諏訪市蔵	堺町20	㊦諏訪市蔵商店	呉服太物毛織物仕立 物問屋	明28	北五箇荘村
60	藤川政之助	稲穂町14	△藤川商店	酒類、醬油味噌販 売		蒲生郡玉緒村
61	田中伊蔵	山田町	△田中伊蔵	太物古着卸小売 商	明18	愛知郡豊埴村
62	椿居啓次郎	花園町14		日本銀行員	明42	彦根町
63	澤谷廣太郎	稲穂町12		漁業	明32	東浅井郡虎姫町
64	川村宇之助	堺町21	㊦川村支店	呉服太物毛織物 仕立物問屋	明32	坂田郡鳥居本村
65	小杉仁右衛門	若松町20	△だるまや	呉服太物、洋織 物商	明34	北五箇荘村
66	中嶋長治	相生町23	△中嶋長治商店	呉服太物商	明30	愛知郡下八木村

67	水谷眞一	山田町7		印刷業		八幡村
68		入舟町66	㊦古川商店	襟類卸商		犬上郡豊郷村
69	林栄太郎	稲穂町14	㊦林栄太郎	太物、洋服、仕立物	明24	彦根町
70	山脇菊二郎	色内町畑9	△旅館江州屋	旅館	明21	南五箇荘村
71	笈祐右衛門	色内町畑10	月見	料理すし仕出し	明32	坂田郡神照村
72	氏原惣治	稲穂町19	㊦氏原惣治	薪炭商	明37	坂田郡鳥居本村
73	辰巳喜三郎	山田町6	㊦辰巳喜三郎	太物毛織物仕立物古着商	明36	北五箇荘村
74	中村常次郎	花園町6	㊦中村常次郎	仕立物卸専業	明23	北五箇荘村
75	西沢寿三郎	山田町11	㊦西沢寿三郎	落花生、空豆、豌豆問屋	明23	大津市
76	藤井音吉	山田町6	㊦藤井音吉	洋服毛織物仕立物古着商	明26	北五箇荘村
77	富田寅治郎	山田町7	㊦富田寅治郎	太物毛織物古着仕立物商	明35	蒲生郡玉緒村
78	田中庄之助	色内町52	㊦田中庄之助商店	油類酒類味噌醤油	明38	高島郡海津村
79	松村吉五郎	色内町48	㊦松村吉五郎	呉服太物、洋織物商	明39	甲賀郡大原村
80	松林重太郎	稲穂町48	㊦松林重太郎	呉服太物商	明20	犬上郡福満村
81	林與惣七	花園町14	㊦栄林堂	内外書籍文房具類、石鹼	明34	犬上郡磯田村
82	岩崎真成	奥沢村	専命寺住職	住職	明27	東浅井郡虎姫村
83	富田実英	手宮裡町	興聖寺別院	寺院管理	明38	彦根町
84	太田與惣五郎	花園町畑7	㊦太田與惣五郎	石蠟製造業	明38	愛知郡東押立村
85	沖豊吉	花園町畑7	㊦沖豊吉	種物雑貨、煙草	明30	神崎郡旭村
86	村上平吉	稲穂町48	㊦村上平吉	呉服太物、洋織物商	明27	愛知郡中宿村
87	中川浅吉	花園町中央通り	㊦中川浅吉商店	海陸物産、生糸蚕繭売買	明40	東浅井郡速水村
88	平元茂左衛門	手宮裡町本田澤	㊦平元茂左衛門	畜産業	明19	草津町
89	石田安治郎	稲穂町中央商館前	㊦石田安治郎	あわおこし卸小売	明42	野洲郡玉津村
90	藻寄寿三郎	信香裡町12	㊦藻寄寿三郎	呉服太物、薬種売薬商		南五箇荘村
91	尾中安治郎	入舟町37	㊦尾中安治郎	缶詰雑貨卸商	明16	神崎郡栗見荘村
92	鈴木喜三郎	花園町14		呉服商	明27	彦根町
93	宮川弥吉	住初町37	㊦宮川弥吉	呉服商	明17	愛知郡稲枝村
94	千代保太郎	住初町34	㊦千代保太郎	木材業	明34	草津町
95	黄地桑吉	稲穂町2	㊦黄地桑吉	落花生、空豆、豌豆卸商	明26	愛知郡豊掠村
96	山中辰治郎	色内町50	㊦山中辰治郎	林檎玉葱馬鈴薯内外輸出商	明16	愛知郡角井村
97	竹沢伊三郎	色内町52	雅楽多軒 ㊦	和洋菓子製造卸小売商	明29	甲賀郡信楽村
98	平田梅吉	山ノ上町6	㊦平田梅吉商店	各種糸類卸商	明30	蒲生郡武佐村
99	塚本宇七	山田町	㊦塚本宇七	新古家具売買	明39	南五箇荘村

100	山本周彌	花園町15	㊦山本周彌	呉服商	明36	愛知郡稲枝村
101	角田庄太郎	稲穂町2	㊦近江亭	和洋料理	明19	犬上郡日夏村
102	野坂寅之助	堺町22	㊦野沢寅之助	海陸物産商	明41	東浅井郡虎姫村
103	川島岩右衛門	色内橋詰	愛心堂	帳簿製造印刷 団扇引札名刺	明33	南五箇荘村
104	寺村新太郎	土場町1	㊦寺村新太郎	新古建具畳家具 一式	明34	犬上郡松原村
105	川島新治郎	若松町22	近江屋△川島新治郎	古着古道具書画骨董 古金属売買	明32	南五箇荘村
106	日根野新蔵	花園町7	㊦日根野新蔵	各種靴製造販売業	明26	北五箇荘村
107	北川直助	塩谷蘭島		水産業	明13	犬上郡高宮村
108	竹内茂一	塩谷忍路		水産業	明16	八幡町
109	武村忠夫	塩谷伍助沢		教員	明39	栗田郡葉山村
110	藤野龍雄	色内町52	安直亭	料理		犬上郡東甲良村
111	安武定一		小樽警察署長	警察官		
112	石部雄海	稲穂町裁判所官舎	小樽区裁判所検事			甲賀郡石部村

< 出典 > 野沢鉄嶺著「北海道在住滋賀県人」発行所 北海道滋賀県人同盟会  
発行兼編輯 野沢善三郎 明治43年発行  
\* 渡道年中「創」は「創立年」

### 第3節 『県人録』の分析

#### 1 属性分析

##### 事業名

表1の分析において最初に取り上げるのは事業名である。まず、会社形態に注目しよう。小樽に合名、合資、株式等の組織による営業会社が現れたのは、明治10年代の半ばからであったが、その発達はやはり20年代であったという<sup>4)</sup>。明治44年段階の会社分布をうかがうと、商業部門で株式会社19、合資会社40、合名会社29と圧倒的に合資会社が多数を占めている<sup>5)</sup>。

本表中会社を名乗るのは、吉田合資会社、合資会社若林貞三商店、小杉合名会社小樽支店、神野兄弟合名会社小樽支店、池田合名会社、馬場合名会社のわずかの6社にすぎない。残りは、㊦速水豊次郎、㊦村林巳之助商店のように印+事業者名、印+商店名を事業名とするのが一般的である。

4) 小樽市『小樽市史』第2巻 昭和38年、351頁

5) 渡部義顕『小樽区史』左文字書店、大正3年、391頁



ということは、会社組織を利用するまでに事業として成長せず、資金需要が未だ旺盛ではない段階にとどまっていることが第1の要因であろう。一方、㊦速水豊次郎のように印+事業者名を事業名とすることで十分に信用を担保できる商慣習時代であることが第2の要因として挙げることができよう。

ところで、こうした趨勢に加えて、印も事業者名も用いずに（あるいは併用して）、だるまや、栄林堂、雅楽多軒、愛心堂、近江屋、安直亭の類例に見られるように屋号を事業名として用いるケースが多いのは注目に値するといえよう。個人信用と継続性を前提とする営業信用との併用現象ということであろうか。

### 職業別構成

今、表1の「事業種」欄において事業別に集計して移住者の職業選択の傾向をうかがうと表2のようになる。特出しているのは、呉服・太物を中心とする繊維関係で実に37を数える。次いで多いのは、農産物、海産物、食品を含めたグループで22名となり、明治期の新興経済を反映している。

表2 職業別構成

業種	人数	業種	人数	業種	人数	業種	人数
農産物商	7	金属、機械	1	履物	1	代理業	1
海産物商	5	油、蠟	1	小間物	2	仲立業	1
食品	10	漁網、ロープ	1	葉種	3	旅館、料理店	6
薪炭	1	家具、建具	2	書籍、文具	2	農業	2
肥料	1	革製品	2	印刷	3	水産業	5
木材	3	呉服、太物	37	運送業	1	その他	8
石材、窯業	2	古着	2	質屋業	2	計	112

一方、「事業種」欄で「問屋・卸」を表号するものは112名中19名に上り、小樽の流通基地としての地域特性を反映している。ただ、注意しなければならないのは、「問屋・卸」を表号しない単なる小売商であってもその商圏は道内各地に及び、「問屋・卸」と同等の役割を果たす商店が多く存在したことは銘

記する必要がある。この点に関して小倉は、近江商人に見られる「産物廻し」というよりは、「北海道の流通経済の担当者としての役割」<sup>6)</sup>を果たしたと高く評価する。

また、職業選択と出身地の関りに目を転じると、「北五箇荘」出身者10名中8名までが「呉服・太物」を中心とした繊維関係に従事していることに驚かされる。時期的にも、大半が明治23年に始まって明治36年までの13年間に集中している。このことは、出身地縁にもとづく間柄の親密さを物語っているといえよう。

同じような傾向は「呉服・太物」と「犬上郡高宮地区」の間にもみられ、同地区出身者6人のうち3人が「呉服・太物」問屋であり、一人が「呉服・太物」小売りに従事している。

### 渡道年代別比較

渡道年がどの年代に集中しているのかを函館、札幌と比較してみた(表3)。

表3 渡道年都市比較

渡道年代	小樽市	札幌市	函館市
明治以前	2		1
明治1ケタ	2	2	7
明治10年代	20	3	9
明治20年代	29	10	27
明治30年代	37	16	28
明治40年代	7	17	2
計	97	48	74

表1より作成。対象を実業関係に限った。

3市を比較して数的にも盛んなのが小樽であり、札幌市は今一つ動きが見え

6) 小倉、前掲注3、51頁

ないといえる。小樽の場合、明治30年代を最盛期とするも、10年代、20年代もそれに準じて渡道の勢いがみられる。他方、札幌の場合、20年代から40年代にかけてなだらかな増勢を見せている。函館は20年代と30年代が伯仲しているのが特徴といえよう。

### 創立年記載の問題点

表1においては「渡道年」欄において渡道年ではなく創立年記載者が11名にも上り、創業地が江州であるのか、渡道後の北海道であるのか不明である。それと同時に、創立が事業としてのものなのか、ある会社形態についてのものなのか判断できないものも多い。これらは、残念ながら本表の欠陥といわねばならない。

ここで一定程度の情報を補っておこう。

#### No.12 中松小樽支店

渡道年欄に「創立明治40年」とあり、棟方虎夫『小樽』には「合名会社 大正2年2月の創立」<sup>7)</sup>とある。このずれは、創業が明治40年で合名会社設立が大正2年とみればよからう。

#### No.15 神野兄弟合名会社

前掲『小樽』では「合名会社創立明治43年5月」<sup>8)</sup>となっていることから、渡道年欄に「創立明治32年」とあるのは事業創業を意味していると考えられる。

#### No.17 若林貞三商店

『小樽』に「合資会社若林商店 色内町（創業）明治42年9月 2千円 若林貞三」<sup>9)</sup>記載あり。

#### No.19 西村喜代登

来樽 明治27年、『小樽歴史年表』（以下、『年表』と略記）明治34年5月「入

7) 棟方虎夫『小樽』小樽発行所、大正3年、528頁（以下『小樽』と略記）

8) 同上、529頁

9) 同上、513頁

船町畑4の西村石鹼曹達製造所開業」(殖民広報47号)<sup>10)</sup> 製造額 3万余円<sup>11)</sup>。

#### No.23 池田合名会社

創立明治20年とあるがこれは個人商舗の創業を意味し、合名会社設立は『小樽』によれば、明治39年である<sup>12)</sup>。

#### No.25 馬場合名会社

明治19年に渡道して最初岩内で呉服店を営み、明治36年に・馬場合名会社創立<sup>13)</sup>、明治39年に小樽に本店を移転。通称山三呉服店<sup>14)</sup>。

#### No.33 伏木徳二郎

徳二郎は父和喜次郎の跡継ぎで明治17年生まれ。和喜次郎は坂田郡神坂村の出で、明治3年渡道 各地各業種を歷程、明治21年 酢醸造所開設 味噌製造も兼営 明治33年55歳で死去<sup>15)</sup>。

#### No.65 小杉仁右衛門

明治2年の生まれ。19年に函館に渡り呉服商を営む。大火を被り小樽で呉服商を再開。来樽は表1の渡道年明治34年か<sup>16)</sup>。

## 2 他の人名録における近江商人

### (1) 大阪版県人録

『県人録』はその活動する拠点々々において収録されている。近江商人に関してその中で有力なのは、次に取上げる大阪版県人録である。これは駒井喜一『県外近江人名簿』で『北海道在住滋賀県人』の発行から幾分遅れた大正12年に出版された。表1に記載済みのものを除いた小樽在住者が表4の11名である。

10) 渡辺真吾著渡辺真吾・土屋周三編『小樽歴史年表～戦前編～』特定非営利活動法人歴史文化研究所、2006年、『殖民広報』47号、61頁(以下『歴史年表』と略記)

11) 山崎鑑三『小樽区外七郡案内』小樽区外七郡案内発行所、明治42年、176頁

12) 『小樽』、527頁

13) 『小樽』、529頁

14) 『小樽』、591頁

15) 山崎、前掲注11、191頁

16) 小樽名鑑編纂事務所『小樽名鑑』大正12年、67頁(以下、『小樽名鑑』と略記)

表 4 大阪版近江人名簿

氏名	住所	業種	出身地
三輪徳三郎	山田町通相生町角	木綿太物卸商	彦根町
吉永忠三郎	入舟町	小杉合名会社小樽支店支配人	蒲生郡日野町
松吉直彦	色内町7丁目	食料品缶詰卸商	八日市町
松本菊次郎	永井町1ノ23	呉服問屋前川太兵衛支店支配人	八幡町
前川伝策	入舟町2丁目	洋反物卸商	犬上郡松原村
名畑熊吉	住初町2ノ7	呉服木綿卸商	犬上郡福満村
辻田善之助	花園町	北海道産業株式会社専務取締役	東浅井郡速水村
加藤主計	富岡町	三社売炭所長	大津市
尾本秀太郎	入舟町1丁目	呉服半襟商	犬上郡多賀村
馬場善三郎	入舟町17	呉服太物商	犬上郡高宮町
石橋繁蔵	奥沢町	醤油醸造業	彦根町

出典：駒井喜一『県外近江人名簿』大阪近江人協会，大正12年

注)『北海道在住滋賀県人』との重複分(9名)は除外した

表1のように「渡道年」欄が設けられていないので、いささか活動歴が不明瞭であるが、第2世代がどのような活動をしているのかがうかがわれて興味深い。

一部の人材について情報を補足すれば以下ようになる。

#### 石橋繁蔵

㊦石橋彦三郎商店記事中「不幸なことに彦三郎に代わって店を総攬していた女婿泰一、繁蔵が相次いで亡くなり、」<sup>17)</sup>とあり、石橋彦三郎の係累であることがわかる。ただ、繁蔵の履歴については詳細不明。

#### 尾本秀太郎

『小樽商工名録(昭和5年版)』呉服太物欄に「㊦尾本秀太郎 創立大正5年」<sup>18)</sup>記載あり。

17) 関正燈『店祖 野口吉次郎の生涯』野口礼二，平成2年，34頁

18) 小樽商工会議所『小樽商工名録』昭和5年，58頁

名畑熊吉

『小樽商工案内（大正4年版）』和洋反物欄に「呉服、太物、販売 住初町24 又近江屋 名畑熊吉」<sup>19)</sup>の記載あり。

馬場善三郎

『小樽商工名録（昭和5年版）』「呉服、太物」欄に「**△**馬場善三郎」<sup>20)</sup>記載あり。印**△**が共通であるところから表1にある馬場栄吉 馬場呉服店の後継者であろう。

前川伝策

『小樽商工名録（昭和5年版）』呉服、太物欄に「**△**前川傳策 創立大正9年」<sup>21)</sup>記載あり。

## (2) 『北海道実業人名録』

次に、表1の確実度を高めるため実業家に限った人名録の『北海道実業人名録』<sup>22)</sup>の中に表1採録のものがどのくらい含まれているかを調べてみよう。

その結果、292名（店）中、近江商人とみなされるものは次の12名（店）である。それらは、松前からの流れの中心となった松前・鯉漁組（第1群）とそれ以外の商店のグループ（第2群）に分けることができよう。後者には、明治初年組もいれば、20年代参入組もいる。ある意味では雑多である。

### 第1群

大場庄兵衛（水産業）、岡田八十治支店（呉服太物卸小売）、珠玖支店（呉服太物、洋反物商）、西川貞二郎支店（水産肥料諸缶詰商）<sup>23)</sup>

### 第2群

石橋彦三郎（呉服太物、洋反物卸売、金庫一手販売、醤油醸造卸売）、中

19) 小樽商工会議所『小樽商工案内』大正4年、133頁

20) 小樽商工会議所、前掲注18、57頁

21) 小樽商工会議所、前掲注18、61頁

22) 松井十郎『北海道実業人名録』明治27年

23) 大場庄兵衛は西川にあって重要な立場にあり、珠玖支店は西川の小樽の店を閉める際にそれなりの役を果たしたが、ここでは触れない。

井戸利助（呉服太物，洋反物卸商），堀井音次郎（和洋小間物，各種時計，洋酒缶詰），村林己之助（履物問屋），松岡松蔵（靴製造販売），近江堂（和洋書籍文房具商），池田支店（宇治製茶卸商），麻里英三（魚油製造，汽船業）

## 第4節 近江商人活動の諸側面

本節では，これまでの部分的な補足では補いえなかった個別ケースを取り上げて明治大正期の小樽における近江商人の活動を点描してみたい。

### 1 麻里英三

麻里は『北海道実業人名録』に「魚油製造併汽船業 サ麻里英三」<sup>24)</sup>と記載されていた。表1において No.13「麻里伝之助」は英三と同居所で船船業を名乗っているところから，英三の縁者であると推定される。伝之助の出身は東浅井郡朝日村<sup>25)</sup>。その意味で，麻里も広義の近江商人として扱う。

英三は嘉永5年福山の農家の生れ，幼名を能代屋豊三郎といった。幼いときに漁家に養子に入った。13歳の時に漁家山田文右衛門に奉公に出た。明治5年小樽信香町に移住し，荒物商，割烹をてがけた<sup>26)</sup>。

明治16年肝油・鯨油製造に着手し，19年，渡辺兵四郎らの出資を受け，鯨油の海外輸出を目指して小樽精油工場を作り<sup>27)</sup>，麻里英三が経営に当たった。当初，成績は低迷したが，のち，品質向上に成功し明治34年のフランス大博覧会金牌賞を得るまでに至った<sup>28)</sup>。

精油業に携わって痛感したのは，北海道，特に小樽以北への交通機関の不備であった。英三は明治21年，自力で汽船会社を起こす決心をした。先鞭をなす飛竜丸（78噸）の船体価格は千5百円であった。手付けを打ったものの，

24) 松井，前掲注22，325頁

25) 野沢鉄嶺『北海道在住滋賀県人』北海道滋賀県人同盟会，明治43年70頁

26) 田尻稻堂編『北海道小樽区実業家百撰立志編』明治36年4頁

27) 『市史』第1巻，487頁

28) 坂牛祐直『小樽の人と名勝』昭和6年，331頁

残りは渡辺兵四郎からの借財に頼るしかなかった<sup>29)</sup>。

英三は手にした飛龍丸を使い、渡辺、藤山要吉、増谷平吉と語り合って樺太の漁業探検に向かった。北見沿岸からコルサコフ（元大泊）に向けて明治21年9月に出帆し、漂着を装って探索に当たり、目的を果たして帰還し得た<sup>30)</sup>。

一方、明治22年、天塩・北見地方の漁業者及び商業者が交通不便を解消すべく運輸会社を企図し、小樽の藤山要吉、金子元三郎、遠藤又兵衛、麻里英三らも加わり、23年5月1日増毛郡弁天町に資金5万円で天塩北見漕運会社を設立した。麻里は支配人を務め、小樽奥地間の定航及び郵便物送達を主務として天塩丸、北見丸、北信丸の3隻で運航に努力したが、天候不良や流氷などで運航実績を伸ばせず経営不振に陥り、30年末解散に追い込まれた<sup>31)</sup>。

麻里汽船は明治24年に凌波丸を購入して経営を軌道に乗せ、45年までの24年の長期にわたり北洋汽船界の中軸を担った。小樽港の出帆広告で麻里汽船の出帆広告が日本郵船、藤山汽船と並んで掲げられた<sup>32)</sup>。

麻里汽船の明治20年代初期の航海に見るように、塩田回漕店元扱いで行先

29) 田尻稲堂編『北海道小樽区実業家百撰立志編』明治36年 4頁

30) 外産業調査会篇『北海道産業発達史』中外産業調査会、大正7年、738頁（以下、『発達史』と略記）

この藤山の探検記は用船が飛龍丸であること、時期が明治21年であり、『歴史年表』にある明治31年12月8日「麻里英三は汽船業十周年祝宴開催」（53頁）と時期が符合する。『小樽区実業家百撰立志編』、『小樽区外七郡案内』も飛龍丸購入を明治22年としているが、探検記に依り21年とする。なお、探検出発については、北海道総務部行政資料室『開拓の群像（下）』1969、139頁の記事に依る。

ただ、船体噸数に関しては、探検記は40噸とするが、奥地航路の航行実態からみて『立志編』と坂牛の78噸が妥当であろう。

何よりも、この探検記の根本的な欠陥は、飛龍丸所有者を英三と明記しえない認識不足である。

31) 久松義典『開拓指鍼北海道通覧』明治26年、603頁、『市史』、第2巻188-9頁。

32) 残念ながらそれぞれの船舶についての海難情報がすべて記事として掲載されるとは限らず、これを新聞の一般記事から求めるのは難しく、次善の策として広告欄の運航案内に依った。つまり、運航案内が最終であれば、その理由はその航海で海難に遭遇したか、船を他社に売却したかのいずれかの可能性が高い。いわば、航行案内は業務を直接反映するとともに、それぞれの船舶の消息の指標と見なすことが出来る。



表5 麻里汽船運航表

汽船名	始航時期	確認手段	退役時期	確認手段	運航期間	活動地域	就航期間
飛竜丸	明治21年	『発達史』 <sup>1)</sup>	明治30年1月13日	小樽新聞最終運航案内	9年	浜益、増毛	
凌波丸	明治24年	『立志編』 <sup>2)</sup>	明治44年12月2日	北海タイムス最終運航案内	20年	鬼脇、鷺泊、礼文、稚内、枝幸	
苦前丸	明治26年	『立志編』 <sup>2)</sup>	明治39年7月 <sup>3)</sup>	北海道毎日新聞最終運航案内	13年	増毛、鬼鹿、苫前、羽幌、留萌	
第一生田丸	明治30年6月1日	小樽新聞運航案内	明治37年4月	小樽新聞運航案内	7年	鬼脇、鷺泊、礼文、稚内、天売、磯尻	
第二凌波丸	明治31年5月4日	小樽新聞運航案内	明治44年10月31日	北海タイムス最終運航案内	13年5か月	鬼脇、鷺泊、礼文、稚内	
枝幸丸	明治36年3月26日	小樽新聞運航案内	明治40年12月10日	小樽新聞最終運航案内	4年8か月	鬼脇、鷺泊、香深、稚内、大泊	
第三凌波丸	明治39年9月30日	小樽新聞運航案内	明治45年6月30日 <sup>4)</sup>	小樽新聞最終運航案内	5年9か月	鬼脇、鷺泊、香深、稚内、海馬島、本斗、真岡	
第二生田丸	明治40年3月1日	小樽新聞運航案内	明治40年12月27日	小樽新聞最終運航案内	9か月	佐渡、伏木、七尾、敦賀	
小野丸	明治40年4月24日	小樽新聞運航案内	明治42年9月11日	小樽新聞最終運航案内	2年5か月	佐渡、伏木、直江津	
第二小野丸	明治40年11月3日	小樽新聞運航案内	明治41年10月5日	小樽新聞最終運航案内	11か月	佐渡、伏木	
第五凌波丸	明治44年6月26日	小樽新聞運航案内	明治45年1月19日	小樽新聞最終運航案内	7か月	鬼脇、鷺泊、香形、香深、船泊、稚内	

注1) 中外産業調査会編『北海道産業発達史』大正7年、738頁

注2) 田尻稲草編『北海道小樽区実業家百撰立志編』明治36年、4頁

注3) 明治32年12月22日沈没経験(『歴史年表』57頁)にもかわらなず明治39年9月30日ごろまで航行実績を重ねる。

注4) 本船の最終運航案内であると同時に、本日をもって麻里汽船関係の案内が終了となる。

が北海奥地でであった<sup>33)</sup>。この形を定格型ととらえると、30年代半ばまではほぼその形が踏襲されている。経営晩年になると、用船数も多くなり、航路も必ずしも北海奥地とは限らないその時々々の回漕店との契約による航海も出始める。たとえば、明治40年3月1日の第二生田丸の初就航の行先が兵庫、大阪<sup>34)</sup>で、英三の理念とする北方航路から外れている。こうした契約型が40年代に多くなり終盤を迎えるに至る。

終末について坂牛は「好事魔多く突如海難に遭遇して君の所有船は悉く海の藻屑と化し甚大なる打撃を蒙る」<sup>35)</sup>と語り、昭和40年6月28日付けの『北海タイムズ』記事<sup>36)</sup>は、「晩年船が次々に衝突して事業に失敗した」と麻里経営を総括している。事実、「麻里汽船運航表」によれば、明治44年の秋から冬にかけて10月31日に第二凌波丸、12月2日に凌波丸、翌45年1月19日第五凌波丸と実にわずか3ヶ月の間に3隻もが最終運航案内を迎えている。

ところで、上掲記事では英三の息子悌三がオヤジを語っているが、息子がいるとすれば表1登場の「麻里伝之助」がいかなる縁者であるのか謎として残る。

## 2 村林己之助

氏は安政五年神崎郡八幡村字川南の農家に生れた。15歳の明治4年に従兄傳蔵とともに来樽したが、当初、金曇町三宅方で住込炊事夫として辛酸をなめた<sup>37)</sup>。のち、傳蔵の雑貨店経営を助けて自立の為の資金200円を蓄え、明治15年、独立して木炭商を開業する<sup>38)</sup>。その働きぶりと人柄を見込まれ小納宗吉から出資金500円を得て業務を拡張させることができた<sup>39)</sup>。

氏は木炭業に携わること数年にして履物業に転じた。履物業に携わってみて、

33) 久松, 前掲注 31, 610 頁

34) 明治 40 年 3 月 1 日付け小樽新聞広告

35) 坂牛, 前掲注 28, 331 頁

36) 昭和 40 年 6 月 28 日付け『北海タイムズ 小樽経済百年の百人』⑩ 麻里英三

37) 『発達史』, 617 頁

38) 山崎, 前掲注 11, 136 頁

39) 『小樽』, 556 頁

本道が木材の原産地でありながら、下駄台材をわざわざ内地から供給を受けることの不合理を痛感した。工場を設け内地から職工を求め自作を試みたが、職工労賃が高止まりの上、作業の標準化を徹底できず、経営は困難を極めた。

種々、研究を重ねた結果、監獄の囚人を使用すれば、出獄後の授産にもつながり、労賃低廉にして、かつ多数の作業員を確保できると考え実行に移した。6か月間の教習により作業方法の標準化を徹底したところ、低価格製品を市場に提供することができた。その後、原木確保と運送とが必ずしも獄内生産を有利としない状況を認識し、監獄利用をあきらめざるを得なかった<sup>40)</sup>。

対策として、原木（栓、柳、樅、桐など）の所在する山間僻地に工場を設け、製作機械の簡略化を図るなど革新を試み、搬出コストの節減と原料の収約とに努めた。直営工場は小樽区入舟町のほか札幌区豊平、十勝線の帯広、網走線の置戸及び足寄、天塩線の士別に設け<sup>41)</sup> 工場は全部で約50ヶ所にも及んだ<sup>42)</sup>。

大正6年度を見ると、下駄棒の生産高185万本 金額にして666,000円、下駄（5分製乃至7分製）130万足 91,000円、当時、製造高は全国一であり、販路は内地から樺太、台湾、朝鮮、満州に及んだという<sup>43)</sup>。

しかし、昭和8年年版の『小樽商工名録』「履物」欄で「村林己之助」が見当たらない<sup>44)</sup>。当時、旭川の田中木工場（経営者 田中敬造氏）をはじめとして各地で機械下駄製造企業の設立が見られ、田中木工場では下駄の原木からの機械による一貫生産に成功し、機械は10分間に400足を製造する能力を誇ると伝えられる<sup>45)</sup>。主力下駄工場（小樽区入舟町）の焼失（大正9年5月25日）<sup>46)</sup>により体力を奪われていたところへ、新規開発の機械下駄生産技術が普遍化し、下駄原価の急激な低下が起って村林経営が急速に悪化し、没落に至ったと考

40) 『発達史』, 615 頁

41) 『小樽』, 557 頁

42) 『発達史』, 616 頁

43) 『発達史』, 616-7 頁

44) 小樽商工会議所『小樽商工名録』昭和8年, 64～5頁

45) 『発達史』, 848 頁

46) 『歴史年表』, 125 頁

えるのが妥当であろう。

### 3 石橋彦三郎

安政2年、彦根で米穀商を営む石橋彦治の5男として生まれ、捨次郎と名付けられた。石橋は22歳の明治11年に渡道し、小樽で兄の呉服・荒物商を手伝うことになった。明治14年、兄の彦三郎が死去したため、店を継ぐと同時に彦三郎を襲名して二代目店主となった<sup>47)</sup>。その後、渡道前に発揮されていた才気は反物木綿問屋の枠に収まらず海産物商も手がけ、鯨場経営にも携わったという<sup>48)</sup>。

明治20年、本道における醤油の消費は内地産醤油の移入によるところ大であり、北海道産の大豆小麦の優れていること又燃料その他の利点を考えあわせて醤油醸造を志せば、自己一家の利をもたらずのみならず、移入を防止することにつながる、と考え醤油醸造を企図した<sup>49)</sup>。

醸造技術者を求めているところ、郷里金沢で醤油醸造の経験ある野口吉次郎に遭遇し、彼を雇い入れることにより醤油醸造に乗り出した<sup>50)</sup>。

明治20年代の後半、本州大手商社の進出による市場圧迫が呉服・太物・荒物分野を中心に激しさを増し、小樽商業界を牛耳っていた松前出身の近江商人は衰退を余儀なくされた。幸いにも石橋は、醤油事業のほうが軌道に乗りつつあったので呉服・太物・荒物部門を捨て、明治32年醤油事業に転進した<sup>51)</sup>。翌年には奥沢二丁目に新倉を建てて色内町の店をたたんでしまった<sup>52)</sup>。

大正8年でみると、小樽の醤油の醸造高は18,000石を超え、道内一の生産量を誇った。そのうち石橋醸造場は10,000石を産し小樽における醸造の過半数を

---

47) 関、前掲注17、27頁

48) 同上、27-8頁

49) 同上、29頁

50) 『発達史』、617頁

51) 上村雅洋『近江商人の経営史』清文堂、2000年、567頁。その際、塚本商店（後述）に多くの得意先を紹介している。

52) 関、前掲注17、33頁

占めていた<sup>53)</sup>。最盛期には20,000石にも達し野田の茂木(キッコーマン)、上州館林の正田(キッコーショウ)とならび天下の御三家の一つに数えられるにいたった<sup>54)</sup>。

ところが彦三郎に代わって経営に当たっていた女婿石橋泰一、石橋繁蔵の二人が相次いで死去し、以後、支配人制をとっていたが、次第に市場を本州物に食われたうえ、戦時統制の強化による生産縮少を迫られた。戦後も市場変化による業界再編成の気運に抗し切れず、旭川の川島醤油と企業合同し、名も北海道醤油株式会社と改めざるを得なかった。北海道の醤油王として名を馳せた<sup>㊦</sup>石橋商店もここにその名を閉じたのである<sup>55)</sup>。

4 小杉合名

表1における小杉合名会社の渡道年は明治15(1882)年とあるが、同じ『北海道在住滋賀県人』の函館市分にあつては、「呉服太物問屋 小杉合名会社函館支店」の渡道年欄に「明治15年創立」<sup>56)</sup>と記載されている。函館に渡って直ちに呉服太物業に携わったと考えられる。小樽における支店設立の登記は明治32年である。(図3)

その後の同社の動きについて小倉は次のように語る。「第一次世界大戦頃からメリヤスに転じ、本社を東京に移した。昭和18年小杉産業株式会社となり、終戦後はやくも復興、ニット製品の流行に乗って、輸出入と百貨店・専門店向けで業界トップとなった。」<sup>57)</sup>

商號所有者		滋賀縣神崎郡北五箇庄村大字 龍田 小杉五郎左衛門
一 商號	小杉支店	任切町三十一番地
一 營業所	後志	龍田
一 商號主ノ住所	滋賀縣神崎郡北五箇庄村大字 小杉五郎左衛門	小杉支店
一 營業所	龍田	任切町三十一番地
一 商號	小杉支店	任切町三十一番地
一 營業所	龍田	龍田
一 商號主ノ住所	滋賀縣神崎郡北五箇庄村大字 小杉五郎左衛門	小杉支店
一 營業所	龍田	任切町三十一番地
一 商號	小杉支店	任切町三十一番地
一 營業所	龍田	龍田
一 商號主ノ住所	滋賀縣神崎郡北五箇庄村大字 小杉五郎左衛門	小杉支店
一 營業所	龍田	任切町三十一番地
一 商號	小杉支店	任切町三十一番地
一 營業所	龍田	龍田

明治三十三年五月十三日  
右本日登記ヲ了ス此旨公告ス  
小樽區裁判所

図3 明治35年5月14日付 小樽新聞広告

53)『市史』第3巻, 昭和39年, 94-6頁

54) 関, 前掲注17, 33頁

55) 関, 前掲注17, 34頁

56) 野沢, 前掲注1, 169頁

57) 小倉, 前掲注3, 168頁

同社は、大正3（1914）年に東京本社を設け、時点々々で戦略的営業品目をメリヤスやニット製品に定め、機動性を増したことがトップへの道につながったと考えられる。

こうした流れが小樽でどのような動きとなって表れていたのかをうかがってみよう。小樽市のメリヤス工業は、従来、内地産のメリヤス製品を供給してきたが、本道及樺太などの需要に適しないことから、寒地向製品を加工販売する動きが大正10年より本市に新興した。大正10年に1工場であったものが大正14年には17工場に激増し、大正10年、シャツ、ズボン下、靴などの生産高4万1000餘円が14年には約倍の7万9600餘円に増加したのである<sup>58)</sup>。

一方、流通面で織物問屋にあっては、初めメリヤス類は織物に比して売行も僅かであったので力を入れなかったが、世相の変化から洋品に注目するようになる。洋物問屋の寿原が大正5年運動シャツ類の加工に手を染めたのをはじめとして、各種繊維品を取扱い始めた。戸出、[㊦](#)小杉、塚本、小堀等の商店でも綿布の加工に着手し、運動シャツ、股引、エプロン等を製造して売出した<sup>59)</sup>。

小杉小樽支店の昭和5年における営業品目を見ると、「呉服、太物、洋反物、モスリン、メリヤス、足袋、仕立物」<sup>60)</sup>、とあり、新しい業界の動きに対応する姿勢をうかがうことができる。

昭和18年、戦時体制の中で株式会社へと機構変革を行い、小杉産業株式会社を設立した<sup>61)</sup>。本社筋では小倉が述べるように終戦後いち早く復興の波を捕え、ニット製品の流行に乗ることができた。百貨店・専門店向けで業界トップとなった<sup>61)</sup>。

昭和43（1968）年にはゴルファーのジャック・ニクラウスと専属契約してゴルフウェアを発売し、昭和60（1985）年には、「ゴールデン・ベア」をブランド化した。同年1月に東京証券取引所第2部に上場した<sup>62)</sup>。

58) 小樽市役所『小樽産業経済史』昭和24年、51頁

59) 『市史』第3巻、昭和39年、236頁

60) 小樽商工会議所『小樽商工名録』昭和5年、62頁

61) Wikipedia「株式会社コスギ」参照（20210913）

62) Wikipedia「コスギ」（20210913）

このように中堅アパレルの地位を築いた小杉産業であったが、2000年7月12日のそごうによる民事再生法申請など主力販路である百貨店の不振が直撃した<sup>63)</sup>。「ゴールデン・ベア」という強いブランドを持ちながら、甘い在庫管理が災いして不採算ブランドの整理が遅れ、約百億円の負債を抱えて破産した<sup>64)</sup>。百年を越す長寿企業も127年にして潰えたのである。

この間、2005年投資会社ジェイ・ブリッジの傘下に入る<sup>65)</sup>が、同社の買収は、株価の高騰を待って売り抜けることを狙いとし、小杉の経営を方向付ける意図を持たなかった。2007年4月に投資会社のレゾンキャピタルパートナーズの出資を受け入れて、緻密な生産計画を立てるなど改革に取り組んだが、結果を出すまでに至らなかった<sup>66)</sup>。

2009年3月、同じ北五箇荘村発祥の小泉株式会社が受け皿会社 株式会社コスギを設立して「ゴールデン・ベア」などの事業を継承した。社長には小杉佐太郎が就任している<sup>67)</sup>。

## 5 辻田吉之助と雑穀品質検査

辻田は、明治3年辻田甚三郎の長男として東浅井郡速水村に生まれた。はじめ、郷里で教鞭をとったが、のち、米穀生糸商を営む。明治31年渡道し上川郡滝川で農産商を開業。38年小樽に移住して引き続き農産商を営む<sup>68)</sup>。

その立場から雑穀品質検査制度の立ち上げに積極的にかかわったので、その状況を概説する。明治年間、道内から小樽に移入される農産物の大半は豆類、雑穀であり、府県からは米、麦等が移入されていた。当時の雑穀の取引は、品種が非常に多く、品質基準も産地、取引業者でまちまちであったため殆んどが見本販売であった。加えて相場の変動が激しく、実際の取引に当たっては常に

63) 『日経産業新聞』2000年7月17日付け記事

64) 『日経産業新聞』2009年2月20日付け記事

65) Wikipedia「コスギ」(20210913)

66) 同上

67) Wikipedia「小泉(アッパレル)」(20210913)

68) 『小樽名鑑』、45-6頁

クレームが付きものであった。

明治44年は夏から秋にかけて降雨が続き、豆類の生育が悪く、殊に乾燥不良のため船積み中又は倉入中に腐敗、乱俵、減量をきたし、外国への輸出品の中にも変質して悪臭を放つものなどが続出した。

井上安次郎は輸出向の青豌豆を神戸の三井物産支店に入れていたが、雑穀の品質改良について強い警告をうけた。安次郎は全道の関係有志と改善方法を協議し、本道選出の代議士、東京方面の雑穀問屋及び道庁当局と協議の上、政府に対して猛運動を行い、大正2年北海道雑穀商同業組合連合会設立の認可をうけ、同組合に庁令によって雑穀、澱粉等の検査が委託された。この検査実施に当っては雑穀商、産地生産者、産業組合側から異議があったが、時の道庁橋本勸業部長を初め、小樽業者のうち井上安次郎、中村多四郎、中谷彦太郎、辻田吉之助、高橋直治、岩村徳次郎、香村英太郎、内田長七らの説得によって実施の緒についた。

この検査の規程、方法については富山県の産米検査で実績を持つ中村光徳を理事に迎えて精密な検査規程を定め、これを実行に移した。更に、大正3年連合会総会の決議に基いて生産検査調査会を設け、詳細調査研究の末、大正6年から移輸出検査に並行して道庁から生産検査が連合会へ委任された。

しかし漸次範囲が全道に及び、また検査品も各種農産物を網羅し、受験数も増し、時に検査のなれ合いなどもあり、大正8年に北海道農産物検査所が設立され、検査一切の事務がこれに引継がれた。検査の方法として原則として従来民間時代の規程が踏襲された<sup>69)</sup>。

辻田は大正5年、小樽商業会議所に自己の商店事務所を貸与する<sup>70)</sup>などこの間、世話役的な立場にいたものと考えられる。大正7年現在、辻田は連合会の評議員、代議員を務めている<sup>71)</sup>が、12年には連合会副組長に挙げられている。

69) 市史第3巻 2146頁、第5巻380-3頁、『発達史』356-61頁

70) 『歴史年表』、108頁

71) 『発達史』、848頁



小樽区会議員も務める<sup>72)</sup>。

## 6 弓削万次郎

弓削万次郎は滋賀縣東浅井郡竹生村字下八木の人で、明治9年2月生れである。明治21年根室に渡道し、叔父の海産物商赤井栄蔵商店に勤務した。10余年の勤務の後、小樽の遠藤又兵衛商店に入った。店員として精励を重ね、大いに主人の信用を得るところまで達した。明治41年、獨立して海陸物産商を開業するため遠藤商店を辞去する<sup>73)</sup>。

獨立後、弓削は雜穀、海産、肥料、貿易と多面的に活躍の場を広げ<sup>74)</sup>、大正7年現在、弓削万次郎商店は、雜穀手撰工場（従業員170人）、澱粉精製工場、沃度工場を持つに至った<sup>75)</sup>。

神戸市に支店を設置し、商品販路を国内は勿論、遠く中国方面に広げている。現在の海産物輸出を農産物輸出に切り替えようと全力を傾注している。

業界のために鋭意努力するところが認められて大正7年現在、小樽海産商組合副組長の外、農産物商同業組合評議員、北海道雜穀同業組合聯合会代議員、商業会議所常議員を勤める<sup>76)</sup>。12年には北海道雜穀同業組合聯合会会長を務める<sup>77)</sup>。

『小樽商工名録』（昭和5年版）には、「弓削万次郎商店」の名を見出すことができない<sup>78)</sup>。

## 7 モリカワ産業株式会社

創業者森川増次郎は安政3年の生まれで、明治17（1884）年来樽する<sup>79)</sup>。具

72) 小樽名鑑編纂事務所、前掲注68、46頁

73) 『小樽名鑑』、80頁

74) 小樽商工会議所『小樽商工案内』大正4年版、21、45、79頁

75) 『発達史』、686頁

76) 同上、687頁

77) 『小樽名鑑』、81頁

78) 小樽商工会議所『小樽商工名録』昭和5年版

79) 表1、No.38

服太物業を開業し業務隆盛となるも製網製糸業の将来展望に着目して明治37年山田町に森川製網所を創業する<sup>80)</sup>。

明治42年現在、製網工場は亜麻網亜麻糸 4万5千斤(27,000kg)綿糸網1万斤(6,000kg)の製造を誇る。販路は樺太地方をはじめとして離島北見沿岸に拡張している。漁網部主任は森川清次郎<sup>81)</sup>。

明治45年併設の撚糸工場から出火し漁網工場は焼失したが、同年小樽市緑町に新工場を設立<sup>82)</sup>。

昭和2年、清次郎が増次郎を襲名。昭和23年、販売部門を株式会社森川商店、漁網製造部門を森川漁網株式会社とし、森川正七が両社の社長を兼ねる。昭和47年、森川正一が社長就任。平成1年、それまで独立採算制をとっていたグループ5社を合併し、各部門を本社の統治下においた。社名をモリカワ産業株式会社とし、資本金2,550万円とした。部門は営業本部、生産部、資材部、保険部、食品部の5部門からなる。

平成3年生産工場を新設、配送センターも併設。令和2(2020)年森川令社長就任。

## 8 塚本商店

表1における「塚本長次郎」渡道年欄空白は、塚本家の明治23年に視察を始めてから明治29年小樽塚本商店の開設に至る後発繊維商店の歴史の産物である。

塚本家の出身は神崎郡南五箇荘村川並であり、文化9年に甲府で小間物問屋「紅屋」を創業<sup>83)</sup>した。明治5年東京日本橋に東京店(本店)を開設し、商号を・塚本定次郎と定めた<sup>84)</sup>。

80) 山崎鑑三『小樽区外七郡案内』小樽区外七郡案内発行所、明治42年、170頁、『歴史年表』、70頁(『殖民広報』50号)

81) 山崎、前掲注80、171頁

82) 以下、『モリカワ産業株式会社』HP(20220827)と聞き取りから構成

83) 塚本商事株式会社『ミューズ塚本—170年のあゆみ』1985年、35頁

84) 同上、253頁

明治23年、塚本家としては最初の北海道への商業視察<sup>85)</sup>を行い、室蘭、札幌、小樽、余市などを10日間かけて回っている。翌年には北村正七が小樽をはじめとして古平、余市、幌内、幾春別、札幌、苫小牧、室蘭、西門別、函館を視察し、25年から持ち回り販売方式で開業する本家の許可を得た。さらに明治26年5月、明治27年7月の出張、支店候補家屋の購入などを挟んで、明治29年5月26日小樽区色内町に晴れて小樽塚本商店を開店している<sup>86)</sup>。

こうした経過からは、北海道での商圈開拓に強い意欲を持っていた北村正七の経験に基づいた的確な判断とそれを受け入れた塚本家の対応が開店のカギとなっていることがわかる<sup>87)</sup>。

開店当時の商業習慣は、商品の価格もほとんど正札で現金も掛け売りも同じ価格であるという風にしてすべてが単純で原始的であった。商圈も小樽を中心に漁業地での販売が主であった<sup>88)</sup>。そうした中、明治26年に塚本合名会社を設立<sup>89)</sup>し、会社組織の近代化を進めている。

一方、明治32年には紺織のブランド「柿屋縞」を発表、以後、積極的にブランド戦略を展開する<sup>90)</sup>。明治37年5月8日の小樽大火では社屋は全焼するも、土蔵保管の「柿屋縞」は無事との新聞広告を出している<sup>91)</sup>。

大正期に入ると社屋の拡張が相次ぐ。大正2年秋には新蔵増築、5年には土蔵造り3階建を新築<sup>92)</sup>し、9年にはその左側に新店舗(色内1丁目6-27に現存)を開店<sup>93)</sup>させている。

同年、塚本合名会社が株式会社塚本商店となったため、「小樽塚本商店」は「小樽支店」の位置づけとなる<sup>94)</sup>。昭和に入っても社屋の拡張は続き、8年、支

85) 同上、104頁

86) 塚本商事株式会社、前掲注83、109頁

87) 上村雅洋『近江商人の経営史』清文堂、2000年、565頁

88) 同上、567頁

89) 塚本商事株式会社、前掲注83、259頁

90) 同上

91) 塚本商事株式会社、前掲注83、114頁

92) 同上、263頁

93) 同上、109頁

94) 同上、265頁

店裏手に新館4階建を増築する<sup>95)</sup>。

昭和19年、戦時経済になり支店は物資統制から閉鎖の憂き目にあい（昭和21年再開）、高度経済成長期を迎えては昭和35年、マネキン部営業所を開設<sup>96)</sup>し、昭和41年には小樽支店70周年記念を祝っている<sup>97)</sup>。しかし、景気の移ろいは早く昭和44年、小樽支店は札幌支店に全業務を移管し、その歴史を閉じた<sup>98)</sup>。

## 9 早見商店

早見弥吉は八幡町字魚屋町出身で安政6年生。渡道は明治21年で本人31歳の時、明治27年、呉服太物、洋織物商を営む<sup>99)</sup>。

早見音吉は大正2年小樽区入舟町27番地に丸万早見合名会社を設立。繊維物類及之に付帯する加工品の委託売買を業とする<sup>100)</sup>。

大正4年11月10日、会社目的を呉服太物、莫大小帽子類、及壁砂一式の卸小売販売業に変更、所在地を小樽区入舟町2丁目40番地とする<sup>101)</sup>。大正6年12月24日丸万早見合名会社を解散し、個人商店として石貝灰商(卸小売)を営み、弥吉から受けついで呉服太物、洋織物路線を捨て建築資材へと業態を整理した<sup>102)</sup>。

戦時体制を切り抜けた早見商店は、昭和25年代表を早見一とし、販路を道内にも広げ、昭和36年12月27日、株式会社早見商店を設立し、業容を土木建築材料及び機械の販売へと拡大する。代表取締役は早見三郎で資本金は100万円<sup>103)</sup>である。のち、所在は入船町1丁目6番21号に変わる。

95) 同上, 271 頁

96) 同上, 291 頁

97) 塚本商事株式会社, 前掲注 83, 299 頁

98) 同上, 301 頁

99) 表1, No.24, 小樽商工会議所『小樽商工名鑑』1971年版, 89 頁

100) 大正2年11月20日登記

101) 大正4年11月22日登記

102) 大正6年12月25日登記

103) 昭和36年12月27日登記。なお、『小樽商工名鑑』1964年版, (82頁)は資本金を400万円と記載するが、これは授權資本金額であり、実際の払込資本金は100

昭和41年頃、営業の展開を目指し札幌に出張所を設け、昭和52年頃には出張所を営業所に格上げし、恵庭市にも営業所を設けた。従業員はこの時期19名と最多の陣容となった。昭和62年頃には営業所を支店へと格上げし、さらなる事業展開を図った<sup>104)</sup>。

この間、扱ひ品目も当初の一般的壁材料に建築機械工具を加えるようになり、年商も昭和49年頃には2億6500万円に達するようになった。資本金は長く100万円できたが、1977年版の『小樽商工名鑑』では400万円の記載を見ることが出来る。一方、営業品目に見られた建築機械工具類は昭和52年頃には脱落し、セメント、タイルなどの左官材料を主とするようになる<sup>105)</sup>。

平成18年11月20日資本金を1000万円へと増額している<sup>106)</sup>。

業界の競争の激化ゆえに2020年6月、閉店のやむなきに至った<sup>107)</sup>。弥吉の創業から126年、音吉の転換から91年の歴史であった。

## 10 衣斐質店

伊藤整が小樽高商に入って1年経った頃、通学列車の中で文学青年川崎昇と知り合う。彼は余市のリンゴ園の息子で小樽貯金局に勤務していた。彼は金光教信者の老人夫婦の営む衣斐質店の2階に下宿するようになる。彼の叔母も金光教の熱心な信者という縁である<sup>108)</sup>。

彼らは休刊中の文学雑誌『青空』を復活させる資金を蓄えるため、夜店で高商石鹼とバラの花を売ることを考えた。整は1日おきに塩谷村自宅の垣根バラを取りに帰り、そのほかは川崎の部屋で寝泊まりした。夜店売りは大正13年の夏、川崎が過労で寝込むまで続いた<sup>109)</sup>。

---

万円(2000株×500円)である。

104) 小樽商工会議所『小樽商工名鑑』1964年版82頁、1967年版88頁、1971年版89頁、1987年版76頁

105) 小樽商工会議所『小樽商工名鑑』1974年版102頁、1977年版89頁

106) 平成18年12月25日登記

107) 小樽商工会議所情報

108) 伊藤整『若い詩人の肖像』(新潮現代文学13)昭和56年、21-4頁

109) 同上、26、32頁。「若い詩人の肖像」では、石鹼売りも恋愛も大正12年のこと

質店の店主衣斐千次郎は元治元年（1864）生まれ、出身は滋賀県彦根町字四番町である。渡道は26歳の明治23年<sup>110)</sup>。郷里での質屋業、小樽南樽での繊維問屋などの下積み経験をもとに明治25年12月に28歳で質屋②近江屋を開業した<sup>111)</sup>。

表 6 衣斐質店電話番号

年号	登録名	住所	電話番号	発行所
大正 12	衣斐千次郎 質屋業	稲穂町西 6ノ2	1302 甲	北日本商工社
13	衣斐千次郎 質屋業	稲穂町西 6ノ2	1302 甲	札幌通信局
昭和 9	衣斐千次郎 質屋業	稲穂西 6・2	3523 共	小樽郵便局
10	衣斐千次郎 質屋	稲穂西 6・2	3523 共	小樽郵便局
12	衣斐千次郎 質屋	稲穂西 6・2	3523 共	小樽郵便局
13	衣斐千次郎 質屋	稲穂西 6・2	3523 共	小樽郵便局
14	衣斐千次郎 質屋	稲穂西 6・2	3523 共	小樽郵便局
21	イピー商行 ②衣斐質舗	稲穂西 6・2	3523 共	小樽電話局
25	イピー商行 ②衣斐質店	稲穂西 6・2	3523	札幌電気通信部
30	イピー商行 マルエ衣裳質店	稲穂・西 6-2	3523	日本電電公社
30	衣斐千造商店マルエ	稲穂・西 8-5	3523	日本電電公社
31	イピー商会 マルエ衣裳質店	稲穂西 6-2	3523	日本電電公社
36	衣斐質店	稲穂西 6-2	2-3523	日本電電公社

注 1) 昭和21年、25年業態は「質業綿糸布加工洋品雑貨問屋」

注 2) 電話番号中、「甲」は共同線加入、「共」は共同加入を意味する。

息子の千造は戦後、商号を「イピー商工②衣斐質舗」とし、営業内容に「綿糸布加工洋品雑貨問屋」を加えた。さらに稲穂町西 8ノ5に「衣斐千造商店マルエ」を開いて業態を広げている。町の人からすれば「近間に質屋が2軒軒売している」景色に映ったようである<sup>112)</sup>。彼の発展欲は古平への支店開店にまで

とされているが、実際にはその1年後の大正13夏である。」曾根博義『伝記・伊藤整<詩人の肖像>』株式会社六興出版、昭和52年、203頁

110) 表1, No.22

111) 小樽商工会議所『小樽商工名録』大正11年版、206頁

112) 金久保兵士郎氏談

及んだという<sup>113)</sup>。

(有)アトリエ・ベル（現稲穂2-12-17）が昭和50年衣斐質店の1階に婦人注文服仕立業を開店している。洋裁工場も設け、従業員を3名雇っていた<sup>114)</sup>。住宅地図の表記は「アトリエベル 衣斐」と併記され、この併記は2015年まで続く<sup>115)</sup>。この間、アトリエは裏手の土蔵も使ったようである。2016年以降、衣斐家の記録は途絶える。

## 11 和 光

田中家は、山形藩最上義光の重臣だった初代田中傳右衛門頼直（?～寛永16）が近江への改易により武士から農民の身分となったという歴史を負う<sup>116)</sup>。

19代傳右衛門松太郎は安政2年1月15日に誕生している。田中家は、近江国池庄村で18代にわたり庄屋を務め、かたわら家業として醤油醸造を手掛けていた。明治7年20歳で東海道へ近江麻布の行商に出、明治14年小樽に渡った。小樽を拠点に周辺の農漁村へ売り込んだが、商いに失敗し欠損は万を超える始末。意を決して一旦郷里に戻り、商品全部を携えて再度渡道し、幸運にも北海道の新開の機運を探り当てることが出来た。のち、呉服太物で渡道から4年にして利益を蓄えることが出来た<sup>117)</sup>。

19代傳右衛門は、酒造業が有望であることから、行商で得た資金を充て明治19年入船町56番地で酒造業を始めた<sup>118)</sup>。有能な杜氏を得られず、醤油醸造の経験を頼りに見よう見まねで取り組みはしたが、雑菌による腐敗を回避することができず失敗に終わった<sup>119)</sup>。

失敗にもめげず研究に研究を重ね、醸造を軌道に乗せようという明治26年

---

113) 大橋一弘氏談

114) 小樽商工会議所『小樽商工名鑑』1977年版、72頁

115) 『ゼンリン小樽住宅地図』2015年版、50頁。

116) 白杵美紀「私史 当世私史から辿る小樽史 田中傳右衛門(1)」『小樽学』2022年1月号 38頁

117) 田中傳右衛門、白杵美紀、伊達市いろはの会『十九代記』2021、1-2頁

118) 白杵美紀「田中傳右衛門(3)」『小樽学』2022年3月号、38頁

119) 同上、39頁

6月、工場が火事に見舞われる。ゼロからやり直しである。郷里池庄の財産を処分して数千円を手にすることが出来た<sup>120)</sup>。再度態勢を立て直し、明治40年には547石を産するほどになった<sup>121)</sup>。

変えたのは銘柄だけではない。大正8年11月30日、き田中酒造店から「北洋酒造株式会社」と法人化し、工場も緑町5丁目55に移している<sup>122)</sup>。この間、銘柄も当初の「菊鶴」「吉の川」から「北京」「北京正宗」「北洋一」と多様化し、内地酒と伍していけるだけの品質を保つべく努力し、品評会でも入賞している<sup>123)</sup>。

19代傳右衛門は、高齢による代替わりを考えてか、大正15年3月会社組織から再び個人事業のき田中酒造店に戻している。昭和に入ると大学を卒業した息子舜三に事業を任せ、昭和9年10月13日、80歳の生涯を閉じた。舜三は11月9日に32歳で20代傳右衛門を襲名している<sup>124)</sup>。

20代を待ち構えていたのは、戦時体制であった。安穩とした事業経営は許されず、昭和15年夏、20代は喜一郎、誠一郎の野口親子に製造部門の合同を持ち掛け、その年の10月き田中酒造店と㊸野口商店の製造部合同を実現させている<sup>125)</sup>。この試みは酒造中央会でも予期せぬものであった。当事者の誠一郎も20代の先見の明を高く評価している<sup>126)</sup>。のち昭和19年、企業整備令に基づき17工場が合同して小樽合同酒造株式会社が発足した。合同では㊸野口商店の製造部が中心になり、き田中の緑町の工場は歴史を閉じた。20代は常務取締役として合同組織の統括に当たった。彼は戦後解散して昭和26年に社名が「北の誉」と変わっても現職にとどまり、昭和43年まで職務を全うした<sup>127)</sup>。

昭和25年のこと、20代は夫人の実家である倶知安の高橋呉服店より親戚に

---

120) 田中傳右衛門、白杵美紀、伊達市いろはの会『十九代記』2頁

121) 白杵美紀「田中傳右衛門(3)」『小樽学』2022年3月号42頁

122) 白杵美紀「田中傳右衛門(4)」『小樽学』2022年4月号39頁

123) 同上、40頁

124) 白杵美紀「田中傳右衛門(5)」『小樽学』2022年5月号、38頁

125) 株式会社㊸野口商店『七十年の回顧』1960、18頁

126) 田中傳右衛門『徳潤身』昭和56年、32-3頁

127) 同上



あたる岩城繊維の再建を頼まれ、岩城庄蔵、竹中良雄など7人で岩城繊維株式会社を設立し、しばらく手伝うつもりで取締役社長に就任した。ところが、当の岩城庄蔵が退社したため、職にとどまらざるを得なくなった。当初は繊維卸商として出発したが、昭和28年に小幅反物・京呉服専門卸商に衣替えをしている<sup>128)</sup>。一方、小樽合同酒造の経営にあつて20代は野口家の影響を強く受け、「和光」という言葉に深く共鳴を覚えた<sup>129)</sup>。昭和32年9月1日に、社名を「株式会社 和光繊維」と変更したのはその表れである。

昭和39年札幌に営業所を開設し、お得意先も道南の一部を除いた全道一円に広がりを持ち、業界の指導的立場を確立した。昭和50年展示即売会「和匠苑」を成功させ、以後販売戦略の核とする<sup>130)</sup>。

その後の動きを『株式会社和光HP』<sup>131)</sup>で追えば以下のとおりである。昭和55年10月11日 社長20代田中傳右衛門が死去、11月1日 田中正則常務 社長就任、21代傳右衛門を襲名する。同年、長期経営計画を樹立し、企画室を設置、社員持株制を導入する。平成2年社名を「和光繊維」から「和光」へと変更する。平成21年2月、役員、社員・家族19名の出資で1,300万円増資し、資本金額は5,800万円となる。

「装いの美しさと心の豊かさを提供しよう」との経営理念に則り、きものブティック華（昭和62年10月創業）を手始めとして小売部門の充実を図り、消費者との距離を縮めようとする。現在、KIMONO HANA パセオ店（平成23年）、KOMONO HANA ポールタウン店（令和2年）、KIMONO HANA おあつらえ（平成30年）、和ものや傳の陣容を誇る。

和光社は、昭和53年の早くから積極的な社内共育体制の確立をうたい、スタッフの全員委員会所属（平成27年10月）など参加型経営を目指して活動を

128) 株式会社和光繊維『三十年のあゆみ』昭和55年、19-20頁

129) 同上、19頁。野口家における「人間観」の成熟は、吉次郎の醤油醸造時代の師石橋彦三郎との間に芽生えた信頼と畏敬の念に因を発すると考えられる。関正燈『店祖 野口吉次郎の生涯』野口礼二、平成2年、29頁

130) 同上、20頁

131) 株式会社和光 HP:<https://www.hana-wakou.co.jp> (20220901)

続けている。そこには、「和光」という社名にあるように「信心・友誼」といった精神的根幹が19代田中傳右衛門以来社員文化の底流として脈々として受け継がれてきている。

しかし、以前は会員数120社と数を誇っていた地域の繊維製品卸同業会が近年10社と減少し、終に解散に追い込まれたという<sup>132)</sup>。和光を取り巻く状況は決して生易しいものではない。田中伸一良社長，田中傳右衛門会長，社員一同の健闘を祈ること切である。

## 第5節 おわりに

小樽の明治大正期の経済を担ったのは加越能商人であるという命題は、同時に近江商人はその場で影が薄かったということを意味する。第2節で『北海道実業人名録』に表1リストのメンバーがどれだけ採録されているかを取り上げた時に、出てきたのは292名中12名という圧倒的な数値であった。近江商人の地位の相対的低下を物語るデータで、これほど端的なもの他に見当たらないと言えよう。

次に表1から得た印象は、同一の出身地、同一の業種への集中という選択の狭さである。異郷の地で業を営むにあたって同郷の先輩に頼ったり見倣ったりするということは、いち早く安定を求める已むを得ざる選択であったであろう。この近江商人の特性こそ、過当競争を必然化し、事業を短命に終わらせる最大原因である。

同じ問題は、個人事業と会社形態の関係にもみられる。表1のメンバーは圧倒的に個人事業者が多く、会社形態を選好するケースが少なかった。その原因が近江商人の精神性に基づくかどうかは別にして、合名→合資→株式という会社形態の流れは事業の継続性を担保する途でもあったのである。明治大正期に見られた事業が、昭和5年や8年の『商工名録』に記事を見出せないケースが

---

132) 田中傳右衛門会長談

数多く見られたことこそ、近江商人の行動特性のしからしめるところであったのであろう。

最後に、戦略的転換について語ろう。村林の木炭業から履物業へ、森川の呉服太物から製網業へ、石橋の呉服・荒物から醤油醸造へと業種を変換する決断が下され、それがその後の成長へつながるケースを見出すことができた。彼らは現在の営みを捨てて転身する意思決定を果敢になしているのである。これから襲ってくるリスクを予見し挑戦する気構えが彼らを成長させる要因となりえたのである。

反面から見れば、上述のような過当競争とも言うべき経済の集積を自分たちが生み出し得たが故のリスクであり、転身とみることもできる。小杉が中央で飛躍しえたのも、重厚な支店経営が基盤として形成されていたが故の飛躍であったのである。

## 参考文献

- 久松義典『開拓指鍼北海道通覧』明治26年  
 松井十郎『北海道実業人名録』明治27年  
 高畑宜一『小樽港史』高畑利宜，明治32年  
 田尻稲堂編『北海道小樽区実業家百撰立志編』明治36年  
 山崎鑛三『小樽区外七郡案内』小樽区外七郡案内発行所，明治42年  
 野沢鉄嶺『北海道在住滋賀県人』北海道滋賀県人同盟会，明治43年  
 棟方虎夫『小樽』小樽発行所 大正3年  
 渡部義顕『小樽区史』左文字書店，大正3年  
 小樽商工会議所『小樽商工案内』大正4年  
 中外産業調査会篇『北海道産業発達史』中外産業調査会，大正7年  
 小樽商業会議所『小樽商工名録』大正11年版  
 駒井喜一『県外近江人名簿』大阪近江人協会，大正12年  
 小樽名鑑編纂事務所『小樽名鑑』大正12年

- 札幌通信局『小樽局電話番号簿』大正13年  
小樽商工会議所『小樽商工名録』昭和5年  
坂牛祐直『小樽の人と名勝』昭和6年  
小樽商工会議所『小樽商工名録』昭和8年  
近松文三郎『西川貞二郎』昭和10年  
小樽市役所『小樽産業経済史』昭和24年  
小池信繁編『緑・最上両町史』昭和29年  
株式会社㊦野口商店『七十年の回顧』1960  
株式会社和光繊維『創業十年の歩み』昭和36年  
小樽市『小樽市史』第1巻 昭和33年, 第2巻 昭和38年, 第3巻 昭和39年,  
第5巻 昭和42年  
小樽商工会議所『小樽商工名鑑』1964年版, 1967年版, 1971年版, 1974年版,  
1977年版, 1987年版  
北海道総務部行政資料室『開拓の群像(下)』1969  
和光繊維『和光繊維20年史』昭和45年  
田端宏「場所請負制度崩壊期における請負人資本の活動(1)(2)」『北海道教  
育学大学紀要』(第1部B), 1973, 1974  
曾根博義『伝記・伊藤整<詩人の肖像>』株式会社六興出版, 昭和52年  
小倉栄一郎『近江商人の系譜』日経新書, 昭和55年  
株式会社和光繊維『三十年の歩み』昭和55年  
田中伝右衛門編『徳潤身-故田中伝右衛門追悼集』昭和56年  
江南良三『近江八幡人物伝』近江八幡市郷土史会, 昭和56年  
小倉栄一郎「全国江州系企業調査」『滋賀大学経済学部附属資料館研究紀要』(第  
14号) 36-67 (1981-02)  
塚本商事株式会社『ミュージック塚本-170年のあゆみ』1985年  
小倉栄一郎『近江商人の経営』サンブライ出版, 昭和63年  
須磨正敏『オショロ場所をめぐる人々』静山社, 1989年  
関正燈『店祖 野口吉次郎の生涯』野口礼二, 平成2年

小樽商工会議所『小樽商工会議所百年史』平成8年

上村雅洋『近江商人の経営史』清文堂，2000年

渡辺真吾著渡辺真吾・土屋周三編『小樽歴史年表～戦前編～』特定非営利活動  
法人歴史文化研究所，2006年

伊藤孝博『北海道「海」の人国記』無明舎，2008年

小樽観光大学校運営委員会編『おたる案内人』小樽観光大学校，平成21年

近江八幡市『近江八幡の歴史』第5巻，平成24年

駒井正一『近江商人の漁業経営』平成26年

『ゼンリン住宅地図』1975年版，1979年版，1981年版，1986年版，2003年版，  
2015年版，2016年版

## 謝 辞

高野博康 小樽商科大学グローバル戦略推進センター客員研究員には，基本資料の入手に際してお世話いただいた。市立小樽図書館 阿部館員には重要資料の検索にお世話いただいた。竹内勝治 小樽市総合博物館特別研究員には，「印」作成に全面的にお世話いただいた。臼杵美紀さんには貴重な資料を貸与していただいた。

ここに記して感謝申し上げます。

